



Title	アルタイ型言語の再帰表現について
Author(s)	風間, 伸次郎; KAZAMA, Shinjiro
Citation	北方言語研究, 13, 143-169
Issue Date	2023-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/106654
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89069
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_Kazama.pdf



アルタイ型言語の再帰表現について

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

キーワード：アルタイ型言語、「アルタイ」諸言語、再帰、言語類型論、動詞の自他対応

1. はじめに

再帰的な表現は他動と自動の中間的な性質を示すと言われている (ヤコブセン (1989: 176)、後述)。本研究ではアルタイ型の類型を持つ言語、具体的には「アルタイ」諸言語、朝鮮語、日本語を扱い、多岐に亘る再帰的な事象がこれらの言語では自動詞的な表現によって表現されるのか、他動詞的な表現によって表現されるのか、もしくは何らかの点でその中間的な性質を示すのか、という点を分析する。「アルタイ」諸言語については、チュルク諸語からはトルコ語、モンゴル諸語からはハルハ・モンゴル語 (以下単に「モンゴル語」とする)、ツングース諸語からはナナイ語を扱うことにする¹。以下では動詞の形式²によらず、対格項³があれば広く「他動的表現」とし、なければ「自動的表現」とする。この基準によって本稿の対象言語の表現を分類した上で、あらためて動詞の形式に注目する。形態素の表記に関し、当該の形態素に母音調和等による異形態がある場合にはその代表形の標示に大文字を用いる。トルコ語の語釈はもっぱら竹内 (1989) に、モンゴル語の語釈はもっぱら小沢 (1983) に、朝鮮語の語釈はもっぱら油谷他 (編) (1993) に拠った。

2. 先行研究

以下では再帰的な事象において、①再帰専用の形式を用いる言語、②使役を用いる言語、③自他のゆれなどが観察される言語、の3つに分けて先行研究を見ていくことにする。先行研究には「アルタイ」諸言語、朝鮮語、日本語における再帰表現を扱っているものの他に、通言語的に再帰表現を扱っているものも取り上げる。

2.1. 再帰に再帰専用の形式を用いる言語に関する先行研究

Haspelmath (2003: 225) では再帰に関して下記のような意味領域地図を提案している。

Haspelmath (2003: 225) は anticausative については (仏) *La porte s'est ouverte.* || (露) *Dver' otkryla-s'*. 「ドアが開いた」、deobjective については (露) *Sobaka kusaet-sja.* 「その犬は噛む」、potential passive については (独) *Die neue Roman von Grass verkauft sich gut.* 「グラスの新しい小説はよく売れる」、passive については (露) *Vopros obsuždal-sja komissiej.* 「その問題は委員会で議論された」のような例を示している (太字下線部分が再帰要素)。

¹ 各語族においてこれらの言語を選んだ最大の理由は、コンサルタントの協力を得ることができる状況にあったという点である。

² 再帰や使役の接辞を伴っているか、その言語における形態的な自他対応のうちのいずれの形を示すか、ということを意味する。

³ モンゴル語とトルコ語では無語尾の不定対格、モンゴル語では再帰接辞のついた名詞項 (以下では「再帰項」と呼ぶ)、ナナイ語では指定格のついた形式を含む。

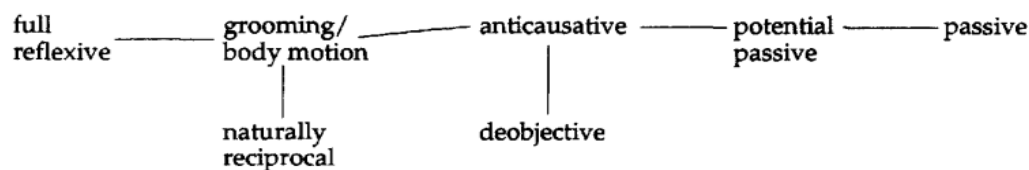


FIG. 8.9. A semantic map for reflexive and middle functions.

トルコ語の再帰／受動／相互の形式については次のような意味領域地図における分布を示している (Haspelmath (2003: 226))。

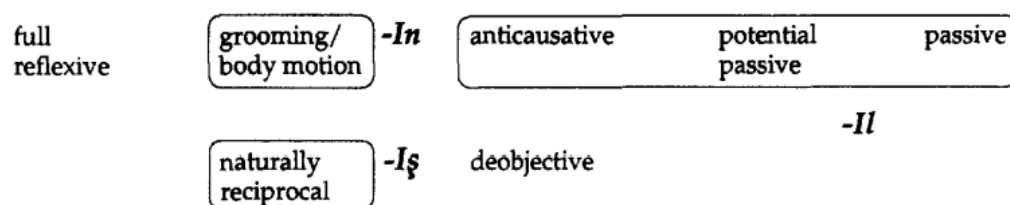


FIG. 8.11. The boundaries of Turkish *-In*, *-Iş*, and *-Il*.

本稿の **4.5.節** 前半では、こうした Haspelmath (2003: 226) の意味領域地図における事象が本稿の対象言語においてどのように表現されているのかを検討する。

Kemmer (1983) は中動態 (middle voice) と呼んで再帰的な事象に有標な動詞形式が用いられる状況のタイプを通言語的に考察した (ただその対象はヨーロッパの言語に偏っている)。以下は Kemmer (1983: 16-20) の分類による再帰的な事象である。

- [1] 身づくろい (Grooming or body care) : 入浴する、髭をそる、髪を梳かす、顔を洗う、など。
- [2] 非他動的な動き (Nontransitional motion) : 伸びをする、振り向く、お辞儀をする
- [3] 姿勢変化 (Change in body posture) : 立つ、座る、ひざまずく、など。
- [4] 自己利益 (Self-benefactive middle) : (自分のために) 得る、頼む、など。
- [5] 本来的相互行為 (Naturally reciprocal events) : 喧嘩する、会う、抱き合う、など。
- [6] 移動運動 (Translational motion) : 登る、行く、歩く、飛ぶ、など。
- [7] 感情・心理変化 (Emotional middle) : 怒る、いらだつ、喜ぶ、退屈する、など。
- [8] 感情的発話行為 (Speech action of an emotive type) : 嘆く、自慢する、など。
- [9] 認知 (Cognition middle) : 考える、覚える、信じる、など。
- [10] 自然発生 (Spontaneous events) : 止まる、育つ、なる、など。
- [11] 話者指示的中動 (Logophoric middle) : 「彼らは自分たちが走るのをみた」

本稿の **4.2.節** では上記のうちの [1] を、**4.3.節** では [3] を、**4.5.節** 後半では [7], [8], [6], [9], [4] を、**4.7.節** では [10] の事象が本稿の対象言語においてどのように表現されているのか、検討する。

林 (2013: 166-167) はトルコ語の再帰形について、わずかな例外 (*sürün*-「～を自分の体に塗る」など) を除いて自動詞となり、目的語をとることはできないとしている。さらに再帰

形は動作対象が自分である場合以外に「動作者や動作対象をはっきりと区別できず、事態全体としてひとりでに生起する場合もある（むしろこちらの使い方の方が多いかもしれない）」とし、次のような例を示している。

sev 愛する sevin (自分を) 愛する → 喜ぶ
 gör 見る görün (自分を) 見る → 見える
 bul 見つける bulun (自分を) 見つける → ある、存在する
 salla 揺らす sallan (自分を) 揺らす → (ひとりでに) 揺れる

語彙的に限られているとはいえ、これはトルコ語の再帰形に逆使役 (anticausative) の用法があることを述べているとみることができる。

江畑・Akmatalieva (2022: 42-45) はサハ語とトゥバ語とキルギス語の再帰形式が、逆使役用法 (派生元の動詞の主語は消去され、動作対象であった名詞項が主語になる) と再帰用法 (派生元の動詞と同じ主語をとる) を持ち、再帰用法は「自分自身を～」のような典型的なケースから、「自分の体を～」 「自分の体を用いて～」 「自分に対して～」 のような幅広い意味をカバーするとしている。トゥバ語の再帰はさらに「対象欠如」「状況不可能」も示すという。ここで江畑・Akmatalieva (2022: 43) が「自分自身を～」のような典型的なケースと呼んでいるものは、上記 Kemmer (1983) の[11] 話者指示的中動 (Logophoric middle) であり、「対象欠如」は Haspelmath (2003: 225) の意味領域地図における deobjective であると考えられる。

トルコ語とは異なり、サハ語とトゥバ語とキルギス語のいずれにおいても再帰用法において対格目的語との共起が可能であるという。サハ語とトゥバ語では (キルギス語でも自然の状態変化を表す動詞ではまれに) 自動詞にも再帰形式が付加されることがあるという。

元朝秘史のモンゴル語における下記の例の mungta-ni- について、小沢 (1985: 166) は mung 「艱難」から出名動詞派生接辞 -ta- により「艱難・辛苦する」が形成され、さらに再帰接辞 -ni- (小沢 (1985) は「反照動詞形成接辞」と呼んでいる) が接尾されてできたものと分析している。

(1) nökör či bū-rün maši mungta-ni-ju ayis-u a-ju'u.
 friend you be-CVB.SIM very suffer-REFL-CVB.IPFV come-IND be-IND.RES
 「友よ、君は非常に苦しんでやって来ているようだ。」 (秘史02:29:08)

現代語では非生産的だが、塩谷 (2007: 181-182) にも「極めて化石的」なものとして記載があり (例は2つのみあがっている: zovni- 「自ら苦しむ、悲しむ」 < zovo- 「苦しむ、心配する」, togtno- 「自ら定まる、安定する」 < togt- 「定まる」)、塩谷 (2007) はこれをチュルク諸語における再帰形式とも比較している。なお本稿ではモンゴル語における「～を嘆く」という事象についても調査を行ったが、上記の動詞 zovni- は用いられなかった。

2. 2. 再帰に使役形式を用いる言語に関する先行研究

Göksel and Kerslake (2005: 146) は 'The causee is usually human, but can also be an inanimate entity to which inherent power is attributed' の例として次のような例を挙げている。

- (2) Şule el-i-ni makina-ya kap-tır-dı.
 P.N. hand-3POSS-ACC machine-DAT catch-CAUS-IND.PST
 ‘Şule got her hand caught in the machine’

ただこの文は非意図的再帰的な行為に使役が用いられた例とみることもできる。

風間 (2002: 38-40, 43-44) ではウイльта語、ナーナイ語、シベ語、トルコ語において使役が再帰的非意図的の行為に用いられることを指摘している。本稿の **4.4.節** では「顔を赤くする」のような非意図的再帰的な行為が本稿の対象言語でどのように表現されるかという点を分析・考察する。

朝鮮語における再帰表現に関して、伊藤 (2012: 136-137) には次のような記述がある（以下は要約により示す、例文の表記⁴・グロス・例文番号は本稿のものに変えた）。

- (3)a. na=nun son=uul ssis-’æss-da.
 I=TOP hand=ACC wash-PST-IND
 「私は手を洗った」
- (3)b. na-nun guu ’ai mom=uur ssis-gi-’æss-da.
 I=TOP that child body=ACC wash-CAUS/TRVLZ-PST-IND
 「私はその子の体を洗った (lit. 私はその子の体を洗わせた)」
- (3)c. na=nun guu ’ai mom=uur ssis-æss-da.
 I=TOP that child body=ACC wash-PST-IND
 「私はその子の体を洗った」

伊藤 (2012) によれば、日本語における「私はその子の体を洗った」という意味を自然な朝鮮語で言うには (3)b. のように使役・他動の -gi- を用いて言う必要があり、もしこれを用いずに (3)c. のように言うと「「その子」は遺体安置所に安置された「動かない」死体である、あるいは例えばヘチマが擬人化されて 1 人称の「私」で語っているような場面が想像されてしまう」という。伊藤 (2012) はさらに「髪を洗う」、「体を洗う」などは、自分自身の身体やその一部、およびモノを洗う場合にはそれぞれ gam-, ssis- を用い、他人やペットの犬などの場合には使役・他動派生接尾辞の付いた gam-gi-, ssis-gi- を用いる。「髪を梳かす」の場合、自分自身の髪ならば、bis- を他人や人形の髪ならば bis-, bis-gi- の両方を用い得る」としている。

以下にこの先行研究の記述に対する筆者の若干の考察を述べる。朝鮮語におけるこうした現象は一見奇異に映るが、次のように説明できる。ssis-「洗う」は対象が身体部位である場合、「再帰動詞」(2.3.2.節で後述) としての特徴を含意していると考えられる。例えば日本語の再帰動詞である「着る」が他人を帰着点にする場合には他動化が必要のように（「子供に服を着せる」、これらの動詞が他人の身体部位に働きかける場合には他動化を必要とするのである。朝鮮語でもやはり再帰動詞であると考えられる ’ib-「着る」の衣服の帰着点が他者に向かう場合にも、同じ使役・他動派生接尾辞が使われる ((4)は伊藤 (2012: 134) による、

⁴ 本稿における朝鮮語のハングルからの翻字は河野 (1955) の方式に拠った。

なお -gi- と -hy- は異形態である)。こうした再帰動詞の振る舞いは日本語と同じである。

- (4) na=nuun dongsain='əigəi 'os=ur 'ib-hy-əss-da.
I=TOP younger.brother=DAT clothes=ACC put.on-CAUS/TRVLZ-PST-IND

韓日辞典である油谷他（編）（1993: 118）では ssis- は他動詞とされており、ssis-gi- には「洗ってやる」の語釈がある。他方、ssis-「洗う」は独立して存在するモノに対しては単なる他動詞として機能するものと考えられる。日本語でも例えば「組む」という動詞は「私は腕を組んだ（、そして考え込んでいた）。」のような文で「腕を組む」という固定的な再帰的表現として使われるが、「私は彼の腕を組んだ。」のような表現は腕だけが彼とは分離して存在しているような感じがして奇妙に感じられる。これは「私は木の棒を組んだ（、そして足場を作った）」のように固定的な再帰的表現でない単なる他動詞としての意味が出て来るためであると思われる。

ただ朝鮮語におけるこのような再帰動詞は身体部位を対格で示す直接の目的語としている点で、日本語の再帰動詞が衣服などの対象物を対格で示す直接の目的語としているのとは異なっている。このように再帰動詞となる動詞の種類や範囲は日朝両言語の間で異なる。したがって他の各言語での状況が問題となる。本稿では本稿の対象言語について、4.1.節で着衣関連の動詞を、4.2.節で身体部位に対する働きかけを示す動詞を分析する。

2.3. 再帰に自他のゆれなどが観察される言語

2.3.1. 再帰表現に用いられる他動的表現

ヤコブセン（1989: 217）は他動詞の伝統的な定義の意味要素を次の4つの要素に分立させている：(a) 関与している事物（人物）が二つある。すなわち、動作主（agent）と対象物（object）である。(b) 動作主に意図性がある。(c) 対象物は変化を被る。(d) 変化は現実の時間において生じる。しかし、他動詞の形態を持つ動詞がこの4つの条件を常に満たしているわけではない。特に再帰を問題にしている本稿の場合、(a) が最も問題となる。

李（2019）は、「再帰性」をもつ他動詞構文を構成する素性として、次の5つの素性を立てた：A 意図的に行う行為か否か、B 対象が動作主あるいは動作主の一部分であるか否か、C 主語自身の行為であるか否か、D（再帰的な）動作対象に物理的な変化が起こるか否か、E 行為の方向が常に再帰的な動作対象に向かう行為であるか否か。その上で5つの素性の重要度の順番はA 自身>B 求心的>C 変化>D 行為>E 意図性、であるとしている。

李（2019）はこれら5つの素性によって、「再帰性」をもつ他動詞構文を下記の6つのタイプに分類した。李（2019）は[1]を「再帰性」をもつ他動詞構文のプロトタイプであるとし、[1]>[2]>[3]>[4]>[5]の順序で再帰性は下がるとみている。

表 1: 「再帰性」をもつ他動詞構文の素性分布

(“+”「存在する」 “+”「存在しない」 “±”「ある程度存在するが、プロトタイプの程度に至っていない」)

例文 \ 素性	A 自身	B 求心的	C 変化	D 行為	E 意図性
[1] 彼はいつも冷水をあびる	+	+	+	+	+
[2] 校長先生は眼鏡をかけた	+	±	±	+	+
[3] 太郎は左足を折った	+	+	+	+	—
[4] 田中さんが虫歯を抜いた	+	+	+	—	+
[5] 太郎は熱を出した	±	—	+	—	—
[6] 次郎は手を振った	+	—	—	+	+

このうち [4] は実際に「虫歯を抜く」という行為を行うのは歯医者であるので、このタイプは主語の指示により別の行為者が行為を行うものであると説明できる。以下このタイプを「間接行為」と呼ぶことにする。本稿では上記の 6 つのタイプのうち [3][5] の非意図的なタイプを **4.6.節**で、[4] の間接行為を **4.5.節**で、[6] の非求心的なタイプを **4.3.節**で扱う。

次に非意図的再帰的行為に関する自動詞と他動詞の中和についてみる。

ヤコブセン (1989: 227) は同一の形式でヲ格の名詞を伴ったり伴わなかったりする例を示している (太字・下線は筆者による) :

- (a) 敵兵がひくまで戦い抜いた。／(b) 敵兵が自国の領土から身をひくまで戦い抜いた。
 (a) 敵兵が寄せてくるのを防ごうとした。／(b) 戦火を逃れて田舎に身を寄せた。
 (a) 犬の尻尾が怖そうに垂れていた。／(b) 犬が尻尾を垂れて怖そうに逃げていった。
 (a) 目があいている。／(b) 目をあいてください。

さらにヤコブセン (1989) は、このうち「ひく」は自他に関して対応するペアを持っていないが、「寄る」「垂れる」「あく」はそれぞれ形態上対応する「寄せる」「垂らす」「あける」をもっているとしている。これらはいずれも再帰的な動作／行為であり、「動詞の形態が他動詞と自動詞の境をうろうろしているのもそこに原因がある」(ヤコブセン (1989: 228)) としている。さらに自動詞では対象物である身体部位が現れないペアも示している: うつむく一顔をうつむける、すくむ一頭をすくめる、など。ヤコブセン (1989: 229) は「道を渡る」「トンネルを通り抜ける」のような移動動作の文に関しても、そのヲ格名詞が対象物ではなく場所を示してはいるものの、動作主が行為をなすと同時にその結果ある変化 (空間的位置が変わる) を被るという点で再帰的な意味が働いているとみている。本稿では **4.5.節**で移動動詞を扱う。

桜井 (1977) によれば、(日本語) 古文においては「命が助かる」と「命を助かる」という対があり、「命を助ける」が誰の命でもよいのと異なり、「命を助かる」は自分の命でしか使わないという。「助ける」が一般的な意味での他動詞であるのに対して、「助かる」は特殊な意味での他動詞であるとし、桜井 (1977) は再帰的他動詞と呼んでいる。

なおやはり古文においては現在ではもっぱら自動詞で使われる動詞がヲ格名詞を取ることが観察された。鈴木 (1985) によれば、このように自動詞形がヲ格名詞をとる表現形式のう

ち、「腹を立つ」「目をあく」などの表現は、徐々に衰退の方向に向かっており、対応する他動詞形による表現（「腹を立てる」「目をあける」）がそれにとって代わろうとしているという。すなわち、ヲ格名詞を取る動詞の形は他動詞の形に統一される方向に変化してきた。このように再帰的表現に関しては、歴史的にもゆれや変化が起きていることがわかる。

2.3.2. 「再帰動詞」

仁田 (1982: 80) は再帰構文を①「再帰動詞」によって再帰性が保持されている文（彼は入浴後いつも冷水を浴びることにしている）と、②「再帰用法」によって再帰性が保持されている文（子供は手を叩いて喜んだ）の2つに分けた。再帰動詞とは「動作主の働きかけが、他の存在ではなく、常に動作主自身に及ぶことによって、動作が終結する」動詞で、「浴びる、かぶる、履く、着る、脱ぐ」などのようなものをいう。他方、再帰用法とは「典型的な他動詞がその一用法として再帰的に使われる場合」で「ヲ格成分が、動作主に付随している動作主の体の一部を表す名詞類によって形成されている」という特色をもつものである。再帰動詞は他動詞であるが（水を浴びる、帽子をかぶる、など）、対応する自動詞がなく、仁田 (1982) はこの点をはじめとするいくつかの特徴を指摘して再帰動詞は自動詞に近づいているということの根拠としている。

一方、天野 (1987a) が指摘するように、帰着点が動作主以外の場合、再帰動詞は形態的に対応する他動詞的な形もしくは使役形となる。

(5)a. 太郎はベレー帽をかぶった。

(5)b. *太郎は次郎の頭にベレー帽をかぶった。

(5)c. 太郎は次郎の頭にベレー帽をかぶせた。（ベレー帽の帰着点は次郎の頭）

なお [かぶる-かぶせる]、[着る-着せる]、[浴びる-浴びせる] などのペアは、それぞれ他方に「かぶらせる」、「着させる」、「浴びさせる」のような規則的に形成される使役形を持ち、他動詞形成要素に見える -se- によって左の要素から右の要素が派生したような形をしている。したがって形態的には自他対応のペアのように見えるが、左の派生元の動詞が既に他動詞である点で特異である。この点については寺村 (1982: 316) に指摘されている。

再帰動詞の上記のような振る舞いとは異なり、他動詞が単に再帰用法で用いられている場合には、帰着点が動作主以外の場合であっても、その他動詞は形を変えずに用いることができる（例文とその解釈も天野 (1987a) による）。天野 (1987a: 2) は「移動先・移動元が動作主自身であるということが動詞の語の意味として内在しているか、していないかが再帰動詞とそうでないものを分ける重要な点である」としている。(5b)(5c)と(6b)を比べるとその点がよくわかる。

(6)a. 太郎は手袋をはめた。

(6)b. 太郎は手袋を次郎の手にはめた。（手袋の帰着点は次郎の手）

ここでも先行研究に対して、筆者による若干の考察を示す。

上記のように、仁田 (1982) と天野 (1987a) は「(手袋を) はめる」のような動詞は単なる他動詞が再帰用法として用いられているとみているようである。たしかに次のような例文

(7)ではベレー帽の帰着点は再帰動詞「かぶる」の動作主である太郎に限定されるが、(8)では限定されない。

(7) 太郎は次郎のベレー帽をかぶった。(ベレー帽の帰着点は太郎の頭)

(8) 太郎は次郎の手袋をはめた。(手袋の帰着点は太郎の手、もしくは次郎の手)

次の文(9)のように帰着点を明示すれば(9)における帰着点の曖昧さは解消される。

(9) 太郎は次郎の手袋を自分の手にはめた／太郎は次郎の手袋を次郎の手にはめた

一方、筆者の内省によれば、テヤル補助動詞を用いて他動詞による再帰用法の文の帰着点を明確にすることもできると思われる。これはテヤル補助動詞が話し手もしくはその身内の視点から他者に動作を及ぼすという意味を含意しているためだと考えられる。

(10) 太郎は次郎の手袋をはめてやった。

本来テヤル補助動詞には名詞項を一つ増やす機能がある。すなわち「私は本を読んだ(他動詞)」であれば、「私は弟に本を読んでやった」となる。しかし(8)>(10)では項の増加は起きていない。ここでテヤル補助動詞は再帰用法において低かった他動性を再び高くするという機能を示しているとみることできるだろう。ここで筆者は「はめる」という語彙自体には再帰の含意はなく、「はめる」は再帰動詞ではないが、「手袋をはめる」という分析的表現の全体にはやはり再帰的な含意が生じているものと考ええる。

さらに次の(11)のような他動詞による再帰表現があるが、この場合は対象である目的語が身体部分であるため、行為が及ぶのはその身体部分の所有者と解釈される。

(11)a. 太郎は手を洗った。

(11)b. 太郎は次郎の手を洗った。(洗う行為の対象は次郎の手)

しかし朝鮮語のような言語では「(手を)洗う」のような動詞が再帰動詞としての性格を持っており、他人が帰着点である場合には使役／他動化を必要とすることは 2.2.節でみた通りである。

本節で検討した再帰動詞は主に着衣に関するものと身体部位に働きかけるものであったが、本稿の対象言語におけるこれらの表現は 4.1.節 および 4.2.節 で検討する。

2.3.3. 「終了」を示す自他両用の動詞

水谷 (1964) は文法的な「ゆれ」という視点から、「話を終わる」と「話を終える」という2つの表現は、その内容が等価であるにもかかわらず自他の両形で表現されるという点に注目し、このような動詞のペアの例を取り上げてそのヲ格名詞の特徴を分析している。上記 2.3.1.節でみた歴史的変遷を扱った研究である鈴木 (1985) も「話が終わる」-「話を終わる」-「話を終える」の表現の組を取り上げている。本稿では 4.7.節 で開始・終了を示す事象の表現を分析する。

3. 調査方法

2 節でみた再帰表現に関する諸先行研究（特に李（2019）や Kemmer(1983)）を参考に、2 節の各所で示した 7 つのグループの諸表現を本稿の対象諸言語において収集し、さらにそれを分析することを目指す。そのためにまず、一連の再帰的表現の日本語による質問票を作成し、多少なりと日本語を解するコンサルタントの方（ナーナイ語話者以外のコンサルタントの方々）からは日本語による聞き出しによって調査を行った。ナーナイ語の話者には媒介言語のロシア語に翻訳した質問票を用い、トルコ語の話者には日本語とともに適宜それを英語に翻訳した文も示した。コンサルタントの情報を以下に示す。

表 2：コンサルタントの情報

言語	略号	生年	出身地
朝鮮語	(K)	1978	慶尚道醴泉郡
ナーナイ語	(N)	1935	Najxin
モンゴル語 1	(M) / (M1)	1989	Zavxan 県
モンゴル語 2	(M) / (M2)	1989	Övürxangaj
トルコ語	(T)	2000	Sinop

以下では例文を示す際に上記の表中の言語名の略号を用いる。モンゴル語に関しては 2 名の話者からの情報を得たが、2 人の方の情報が異なる場合にのみ (M1), (M2) の略号を用い、特に違いがない場合には単に (M) とする。日本語の略号は (J) とする。ナーナイ語に関しては国際電話による調査を余儀なくされたため、他の言語では聞き出しによって得られたいくつかの点に関して情報が得られなかった場合があることをことわっておく。なお聞き出しの際に、他の表現も可能であるか、可能であれば 2 つの表現の間にはどのようなニュアンスの違いがあるか、などを丁寧に聞いて行く必要があるが、筆者の力量不足と時間的制約のため、特に言語によっては最初に話者が答えた表現を記録するのみに終わってしまった場合も少なくない。今回明らかになった問題点等をよく踏まえた上でさらなる調査を行っていくことが今後の課題である。

4. 調査結果

4.1. 着衣「再帰動詞」による制御可能な他動的動作

衣類の帰着点が動作主である場合と他者である場合に同じ動詞の形式を用いればこれを単なる他動詞とみなし ((J) 太郎は手袋をはめた - 太郎は次郎の手に手袋をはめた)、異なる動詞の形式を用いればそのうちの自身が帰着点である方の動詞を「再帰動詞」とみなす ((J) 太郎は帽子をかぶった - 太郎は次郎の頭に帽子をかぶせた、ここでは「かぶる」が再帰動詞)。この基準によって調査結果を示せば次の通りとなった。なお「再帰」は再帰動詞、「他」は他動詞、「―」は調査結果が得られなかったこと、「再帰・他」は動詞によって両用の言い方があることを示し、「他／再帰」は同じ動詞だが両用の表現ができることを示す。以下の表では問題の形式が多い順に、言語は左から、調査対象は上から並べて示す。したがって表 3 では表の左上の方に「再帰動詞」による表現が、右下の方に「他動詞」による表現

が並ぶように配置した。以下別の節の表でも同様である。

表3：本稿の対象諸言語における着衣表現での「再帰動詞」の分布

	朝鮮語	ナーナイ語	日本語	モンゴル語	トルコ語
着る	再帰	再帰	再帰	再帰・他	再帰
(帽子を) かぶる	再帰	再帰	再帰	再帰	他
脱ぐ	再帰	再帰	再帰	他	再帰
(手袋を) はめる	再帰	再帰	他	再帰	他
(メガネを) かける	再帰	—	他	他／再帰	他

まず朝鮮語では自分が着る時には 'ib-da、直接自分が他人に着せる時には 'ib-hi-da (他動／使役接辞)、他人に命令してその他人が自分で着る時には 'ib-gəi ha-da (分析的な使役形) のように述語はそれぞれ異なる形となる。「かぶる」(ssu-da || ssu-i'u-da || ssu-gəi ha-da)、
「脱ぐ」(bəs-da || bəs-gi-da || bəs-gəi ha-da)、「(手袋を) はめる」(ggi-da || ggi-'u-da || ggi-gəi ha-da)、「(メガネを) かける」(ssu-da || ssu-i'u-da || ssu-gəi ha-da) でも同様である。

次にナーナイ語とモンゴル語では自分が着る時には (N) tətugu-, (M) öms-、直接自分が他人に着せる時には (N) tətuləgu-wəən-, (M) öms-üül-、他人に命令してその他人が自分で着る時には(N) tətuləgu-wəən-, (M) öms-üül- のようになり、後二者はいずれも同じ使役形となることが多い。モンゴル語では「帽子をかぶる」、「ズボンをはく」、「手袋をはめる」も öms- によって同様に表現される。ナーナイ語では「手袋をはめる」には tətulə-gu- を用いるが、「帽子をかぶる」には aapon「帽子」から派生した aapola- を用いる。

(12) Bi tūügeer xuvcs-yg n' öms-üül-sen.

I (s)he.INS clothes-ACC 3POSS wear-CAUS-PTCP.PFV

「私は彼に服を着させた (命令して)。」

ただしこの文には解釈が2つあり、もう1つの解釈は「彼を使ってさらに別の人 (自分の子供などに) に服を着るようにさせた」という意味であるという。その曖昧さを排除するには次のように言うという。なおこの文における再帰代名詞 öör-öö は主文の主語である bi 「私」に支配されているのではなく、被使役主である tūügeer 「彼によって」によって支配されている点に注意したい。

(13) Bi tūügeer öör-öör n' xuvcs-yg n' öms-üül-sen.

I (s)he.INS oneself-INS 3POSS clothes-ACC 3POSS wear-CAUS-PTCP.PFV

「私は彼_iに彼_iの服を着させた (命令して)。」

次の意味を示す場合、使役・他動派生接辞は1つでも2つでもよいが、1つでは恩恵の意味が感じられないという。

(14) Bi ter eregtej-g-eer xuvcs-aa öms-üül(-üül)-sen.

I that man-E-INS clothes-REFL wear-CAUS(-CAUS)-PTCP.PFV

「私はその男の人に服を (私に) 着せさせた／私はその男の人に服を着せてもらった。」

梅谷 (2008: 185-186) では、実際の行為者を敬う場合に二重使役形が用いられることを指摘し、その理由は「「実際の行為主の協力や厚意があるからこそ、行為が実現される」という意味合いが感じられるようになる」ためであるとしている。この点については次の 4.2 節で再び問題にする。

なおモンゴル語には *xuvcasla-* 「衣服を着る」 (<*xuvcas* 「衣服」+ 出名動詞接辞 *-IA*) という動詞もあり、この動詞は他人に着せる場合にも同じ形を用いる。ナーナイ語でも他人に着せる場合に *tətuəla-* と若干異なる形になっているが (意味はいずれも「着る」)、*tətuəla-* が *tətuə* 「衣服」+ 出名動詞接辞 *-IA* という構成になっている点でモンゴル語と似た状況を示している。

一方トルコ語では自分が着る時には *giy-* 「着る」、直接自分が他人に着せる時には *giy-dir-* (使役接辞)、他人に命令してその他人が自分で着る時には *giy-in-me-sin-i söyle- put.on-REFL-NMLZ-3POSS-ACC say-* のような迂言的な表現が回答された。

「着る」以外の動詞についても、表中で「再帰」となっているものは同様の振る舞いを見せる。他方、トルコ語の *tak-* 「つける、はめる、かける、しめる、帯びる、着用する」は直接自分が他人に着せる時にも使えるので、再帰動詞ではなく単なる他動詞であると判断した。モンゴル語における *tajl-* 「脱ぐ、(繋いであったものを) 解く、はずす、解説する、解放する」も同様である。しかしモンゴル語の *zүү-* 「携える、身に着ける、仕掛ける、作る、調える: 連れて来る、伴い来る」(「(メガネを) かける」に使用された動詞) は再帰動詞としての性格も示す。

(15) *Bi tүүnij nүдn-ij šil-ijg zүү-sen.*

I (s)he.GEN eye-GEN glass-ACC wear-PTCP.PFV

「私は彼のメガネをかけた。」(なお「(彼に) かけた」という解釈は不可。)

(16) *Bi tүүнд nүдn-ij šil zүү-lge-sen.*

I (s)he.DAT eye-GEN glass wear-CAUS-PTCP.PFV

「私は彼にメガネを {かけさせた／かけ (てやつ) た}。」

二重使役形を用いることもでき、これは次のような意味になるという。ここでも恩恵的な意味が生じていることに注意したい。

(17) *Bi tүүнд nүдn-ij šil zүү-lg-үүл-sen.*

I (s)he.DAT eye-GEN glass wear-CAUS-CAUS-PTCP.PF

「(例えば彼の目が悪くなったので新しくメガネを買って) 私は彼にメガネをかけるようにしてやった」(実際の具体的な行為としては彼が自分でかけてもよいが、誰か他の人がかけたのでもよい、かけた人が誰かはこの文からはわからない、かけるよう頼んだのは私である)

もしくはやりもらいの補助動詞を用いれば文法的であるという。

(18) *Bi tүүнд nүдn-ij šil-ijg zүү-ž ög-sön.*

I (s)he.DAT eye-GEN glass-ACC wear-CVB.IPFV give-PTCP.PFV

「私は彼にメガネをかけてやった」

(M1) によれば、補助動詞を外した *Bi tüünd nüdñij šil züüsen*. 「私は彼にメガネをかけた」には違和感が感じられ、*züüsen* は *Bi xanan-d zurag züü-sen. I wall-DAT painting hang-PTCP.PFV* 「私は壁に絵を掛けた」のような文になら使えるという。このことは日本語でも「私は彼にメガネをかけた」や「私は彼に手袋をはめた」とすると「彼」が「かける場所」のように感じられてすわりが悪く、「かけてやった」「はめてやった」などとやりもらいの補助動詞を後続させると容認度が上がる（筆者⁵内省による）ということと同じ理由によるものであると考えられる。

なお油谷他（編）（1993: 1184, 1463）によれば、朝鮮語では衣類やアクセサリごとにかなり多くの種類の異なった着衣動詞を使い分けるようである。当然慣用句的になり、名詞との結びつきは強く、再帰動詞としての性格は強まるものと考えられる。朝鮮語に見られる再帰性の強さはここに原因があるのかもしれないと考えている。

4.2. 身体部位に対する制御可能な他動的動作

これについては、「爪を切る」、「ヒゲを剃る」、「髪を梳かす」、「髪を結う」、「口を拭く」、「手を洗う」、「歯を磨く」という表現について調査した（ただし「ヒゲを剃る」と「歯を磨く」はナーナイ語のみでは未調査）。調査した結果、先行研究で指摘のあった朝鮮語の「髪を梳かす」と「手を洗う」以外では再帰動詞は観察できなかった。つまりそれ以外では、他人の爪を切っても、他人の手を洗っても、自分の爪を切ったり自分の手を洗ったりするのと同じ動詞を使うことができるということがわかった。トルコ語、モンゴル語、ナーナイ語における「手を洗う」に関する例を示しておく：「私は手を洗った。」(T) *Ben el-ler-im-i yıka-dı-m. I hand-PL-1POSS-ACC wash-PST-1SG* || (M) *Bi gar-aa ugaa-san. I hand-REFL wash-PTCP.PFV* || (N) *Mii ɲaala-ji silko-xam-bi. I hand-REFL.SG wash-PTCP.PFV-1SG*, 「私は彼の手を洗った（直接手を下して）。」(T) *El-ler-in-i yıka-dı-m. hand-PL-3POSS-ACC wash-PST-1SG* || (M) *Bi tüññij gar-yg ugaa-san. I (s)he.GEN hand-REFL wash-PTCP.PFV* || (N) *Mii ɲoani ɲaala-wa-ni silko-xam-bi. I (s)he hand-ACC-3SG wash-PTCP.PFV-1SG*。ただこの場合、モンゴル語とナーナイ語で再帰的に動作が行われる場合には、目的語である「手」に再帰接辞が付き、ナーナイ語ではさらに他者に行う際に行う際に「手」に3人称の人称接辞が付いてその帰着点が明示されている点に注意が必要である。

一方、トルコ語において、他人に命令してその他人が自分で上記の動作を行う場合、つまり日本語であれば単に使役が用いられる場合においては、複雑な状況が観察された。まず「爪を切る」に関して、「私は彼に（私の）爪を切らせた」は *Tırnak-lar-ım-ı kes-tir-di-m. nail-PL-1POSS-ACC cut-CAUS-PST-1SG* と単に使役接辞を用いて言うことができるが、「私は彼に（彼の）爪を切らせた」の場合には、*Tırnaklarını kesmesini söyledim.* と迂言的な表現（4.1節参照）をするとし、*Tırnak-lar-ın-ı kes-tir-di-m. nail-PL-3POSS-ACC cut-CAUS-PST-1SG* は使いづらいという。一方「私は彼に（彼の）髭を剃らせた」の場合は *kestirdim.* と *kesmesini söyledim.*

⁵ 筆者は1965年東京生まれの日本語母語話者である。

のいずれも問題ないという。「私は彼女に（彼女の）髪を梳かさせた」||「私は彼女に（彼女の）髪を結わせた」||「私は彼に（彼の）手を洗わせた」では（迂言的表現も可能であるが）、
 Saç-lar-ın-ı tara-t-tır-dı-m. hair-PL-3POSS-ACC comb-CAUS-CAUS-PST-1SG || Saç-lar-ın-ı bağla-t-tır-dı-m. (s)he.DAT hair-PL-3POSS-ACC do.up-CAUS-CAUS-PST-1SG || El-ler-in-i yıka-t-tır-dı-m. hand-PL-3POSS-ACC wash-CAUS-CAUS-PST-1SG と二重使役形を用いるという。「私は彼に（彼の）口を拭かせた」の場合、迂言的表現で表現されるが、Ağz-ın-ı sil-dir-di-m. mouth-3POSS-ACC wipe-CAUS-PST-1SG と単独の使役を用いた場合、「話者がさらに別のの人に命令して、口の汚れている人の口を拭かせた」という意味になるという。

Göksel and Kerslake (2005: 147-148) では「もし派生元の動詞が (kes-「切る」などの) 他動詞であれば、二重使役形はしばしば単に使役の意味を強調するために用いられるが、これは別の仲介者 (intermediary) の追加を含意することもある。しかしたいていの場合、他動詞の二重使役形は単独使用の使役形と同じ意味である」として、'I had my hair cut.' Saç-ım-ı { kes-tir-di-m ~ kes-tir-t-ti-m }. hair-1POSS-ACC { cut-CAUS-PST-1SG ~ cut-CAUS-CAUS-PST-1SG } の例を挙げている。さらに文中に使役主もしくは使役主と受益者が現れた場合には二重使役形が好まれるとしている。

筆者はここで Göksel and Kerslake (2005: 148) のあげている例が「髪を切る」という再帰的な行為であることに注目したい。再帰的な行為の使役において、行為の帰着点が被使役主である場合には、被使役主は被使役主であると同時に受益者にもなる（二重使役形になるケース）。他方、行為の帰着点が話者である場合には、被使役主は被使役主であるが受益者にはならない（上記の単一使役形による「私の爪を切らせた」のケース）。行為の帰着点とは別の人物を使役した場合には、被使役主は受益者にはなるが被使役主にはならない（上記の単一使役形による「別のの人に命令して、口の汚れている人の口を拭かせた」のケース）。

モンゴル語においても、着衣動詞の場合と同様に、他人に命令してその他人が自分で（もしくはさらに別の他人が）上記の動作を行う場合に二重使役形を用いることができるという。

- (19) Bi tüünij gar-ijg {ugaa-lga-san / ugaa-lg-uul-san}.
 I (s)he.GEN hand-ACC {wash-CAUS-PTCP.PFV / wash-CAUS-CAUS-PTCP.PFV}
 「私は彼の手を洗わせた（命令して）」

なお「私の手」を洗わせた場合にも二重使役形を用いることができるという。

- (20) Bi tüügeer gar-aa {ugaa-lga-san / ugaa-lg-uul-san}.
 I (s)he.INS hand-REFL {wash-CAUS-PTCP.PFV / wash-CAUS-CAUS-PTCP.PFV}
 「私は彼に（私の）手を洗わせた（命令して）」

さらなる調査研究を必要とするが、トルコ語とモンゴル語における二重使役形の使用は再帰的行為における使役と恩恵の重複において生ずるものがあると考えられる。

ナーナイ語では二重使役形は生じないが、再帰接辞の支配に関してやはり興味深い現象が観察された。筆者は次の文(21)では再帰接辞のついた目的語は主語に支配されるために「私は彼に（私の）爪を切らせた」の意味になると考えたが、コンサルタントは「彼自身の

爪を切らせた」の意味になるという。すなわち [xosakta-ji čaaso-] というスコープが生じていて、[xosakta-ji čaaso-waan-] というスコープにはなっていない、ということである。

(21) Mii ŋoam-ba-ni xosakta-ji čaaso-waan-kim-bi.

I (s)he-ACC-3SG nail-REFL.SG cut-CAUS-PTCP.PFV-3SG

「私は彼に（彼の）爪を切らせた」

コンサルタントによれば「私は彼に（私の）爪を切らせた」の意味にするためには次のようにする必要があるという。

(22) Mii ŋoam-ba-ni mənə xosakta-ji čaaso-waan-kim-bi.

I (s)he-ACC-3SG oneself nail-REFL.SG cut-CAUS-PTCP.PFV-3SG

「私は彼に（私の）爪を切らせた」

他方 xosakta 「爪」に3人称の人称接辞をつけると次のような意味になるという。

(23) Mii ŋoam-ba-ni xosakta-wa-ni čaaso-waan-kim-bi.

I (s)he-ACC-3SG ACC-3SG cut-CAUS-PTCP.PFV-3SG

「私は彼に（もう一人別の）彼の爪を切らせた」

これはすでに文中に ŋoambani という3人称の人物が登場している所にさらに3人称接辞のついた名詞を導入すると、その3人称は4人称（obviative）として解釈されるためだと考えられる（風間（2007）を参照されたい）。

4.3. 身体部位に対する制御可能（もしくは制御不可能）な自動的動作

ここでは次のような動作を調査した。すなわち「手を叩く」、「手を振る」、「顔を背ける」、「頭をすくめる」、「肩をすくめる」、「首を吊る」、「首を出す」、「首をかしげる」、「首をうなだれる」、「手をあげる」、「腰を屈める」、「体を起こす」、「目を開ける」である。これらは Kemmer (1983) のいう [2] 非他動的な動き（Nontransitional motion）、および [3] 姿勢変化（Change in body posture）にあたる（2.1.節参照）。

まず日本語について内省してみると、これらの動作はいくつかの種類に分かれると考えられる。①「手を叩く」、「手を振る」などは「手」という自由に動かせる身体部位を用いた意志的な動作であり、対応する自動詞の形を持たない。②「首を吊る／*首が吊り下がる」、「首を出す／*首が出る」、「顔を背ける／*顔が背く」、「頭をすくめる／*頭がすくむ」、「手をあげる／?手があがる」、「首をかしげる／?首がかしぐ」、「肩をすくめる／?肩がすくむ」、「首をうなだれる／?首がうなだれる」、などもある程度自由に動かせる身体部位を用いた動作であるが、対応する自動詞の形を持ち、意志的なものもあるが（「首を吊る」、「手をあげる」など）、やや反射的で無意志的なものもある（「肩をすくめる」、「首をうなだれる」など）。病気など制御不可能な場合や他者を観察している場合には対応する自動詞の表現が可能である（「手があがらないんだよ」、「生徒たちの手があがった」、「寒いと肩がすくむ原因」、「首がうなだれる病気」）。③「腰を屈める／*腰が屈む／屈む」、「体を起こす／?体が起きる／起きる・起き上がる」などは体全体の動作であり、目的語としても主語としても身体部位

を伴わない表現が可能である。④「目を開けた／目が開いた」は②の一種であるとも思われるが、比較的自動詞による表現の頻度が高い動作であると考えられる。

表 4: 本稿の対象諸言語における身体部位への自動的表現での自他動詞の分布

分類	調査例文	ナーナイ語	トルコ語	モンゴル語	日本語	朝鮮語
自在な意志的動作	手を叩く	自 (具格)	他	他 (再帰項)	他	他
	手を振る	自 (具格)	他	他 (再帰項)	他	他
ある程度自由な意志的動作や反射的動作	顔を背ける	自	他	他 (再帰項)	他	他
	首を吊る	他 (再帰代)	他 (再帰代)	他 (再帰代)	他	他
	首を出す	—	他	他 (再帰項)	他	他
	首をかしげる	—	他	他 (再帰項)	他	他
体全体の動作	腰を屈める	自	自	自／他	他	他
	体を起こす	—	自	自	他	他
	目を開ける	他／自	他／自	他／自	他／自	他／自

まずナーナイ語において「手を叩く」、「手を振る」のような非求心的な再帰動作が具格名詞をとる自動詞によって表現されている点が目を引く (Paiŋa-ji-ji paačila-mi agda-nasi-xa-ni. palm-INS-REFL.SG clap-CVB.IPFV be.pleased-MULT-PTCP.PFV-3SG 「手を叩いて喜んだ」 || Daala-ji-ji xarxi-xa-ni. hand-INS-REFL.SG wave-PTCP.PFV-3SG 「手を振った」)。Onenko (1980: 326) には Mama inda-wa paačila-xa-ni. old.woman dog-ACC hit-PTCP.PF-3SG 「おばあさんは犬を叩いた」のような例もみえるので、paačila-「叩く」は行為の帰着点が他の対象に及べば対格名詞もとれることがわかる。他方、Onenko (1980: 456) には Ņoani aapon-ji-ji xarxi-i-ni. (s)he cap-INS-REFL.SG wave-PTCP.IPFV-3SG 「彼は帽子を振った (振って合図した)」のような例があるので、再帰的な動作であれば、身体部位でなくとも具格をとる例のあることが確かめられる。確かにこれらは対象ではなく道具と捉えて具格が使われている、と説明することもできようが、動作主と一体になってある行為を実現しているという点でこれも再帰性の現れの一つとして説明することもできるだろう。

次に「首を吊る」ではナーナイ語とトルコ語とモンゴル語ではそれぞれ (N) Məəpi pasi-xa-ni. oneself.SG.ACC hang-PTCP.PFV-3SG, (T) Kendin-i as-tı. oneself-ACC hang-PST, (M) Öör-iig-öö düüžil-sen. oneself-ACC-REFL hang-PTCP.PFV のように再帰代名詞を目的語にすることによって表現している。

③の「腰を屈める」、「体を起こす」に関しては、(N) Ņoani mukčurəŋ-ki-ni. (s)he bend.down-PTCP.PFV-3SG, (T) O eğ-il-di. (s)he bend-PASS-PST, (M) Ter böxij-sön. (s)he bend.down-PTCP.PFV ~ Ter nuruu-g-aa böxij-lgö-sön. (s)he back-E-REFL bend-CAUS-PTCP.PFV のように表現する。すなわち、モンゴル語で自他両方の表現が可能だが、他は自動詞表現である。ただしトルコ語の自動詞は受身によって派生されたもので、モンゴル語の他動詞は使役接辞によって派生されたものである点に注意が必要である。

最後に「彼が目を開けた／彼の目が開いた」に関しては各言語において自他両方の表現が観察できた: (K) Gu=nun nun='ur dd-əss-da. he=TOP eye=ACC open-PST-IND || Gu=nun nun='i

dd-əjy-əss-da. he=TOP eye=NOM open-PASS-PST-IND, (N) ñoani nasal-bi nixəli-gu-xə-ni. (s)he eye-REFL.SG open-REPET-PTCP.PFV-3SG || ñoani nasal-ni nixəli-kpi-ni (< nixəli-p-ki-ni by metathesis). (s)he eye-3SG open-PASS-PTCP.PFV-3SG, (M) Ter nüd-ee nee-lee. (s)he eye-REFL open-IND.PFV || Tüünii nüd nee-gde-sen. (s)he.GEN eye open-PASS-PTCP.PFV, (T) Göz-ler-in-i aç-tı. eye-PL-3POSS-ACC open-PST || Göz-ler-i aç-ıl-dı. eye-PL-3POSS open-PASS-PST。いわゆる「アルタイ」諸言語のナーナイ語とトルコ語とモンゴル語はいずれも受身をあまり用いない言語であるが、ここではどの言語も受身の接辞を用いて自動詞を派生している。したがってこれらの言語の受身の中核的機能はやはりこのような逆使役 (anticausative) であるとみることができる。

4. 4. 生理的反応などの制御不可能（もしくは可能）な自動的動作・状態

まず調査対象の日本語の表現について筆者の内省による考察を加える。空腹と喉の渇きについて、日本語では「お腹が空いている／お腹を空かしている」と言えるのに対して「喉が渇いている」は言えるが「喉を乾かしている」は言えない。他動詞による表現の方がより観察的であり、1 人称主語では使えない（「*私がお腹を空かしている」）。「くしゃみ」「あくび」「せき」ではどれも「くしゃみが出た／くしゃみをした」のように自他両用の表現ができる。「～が {出る／出た}」は話者自身の行為（もしくは発話の現場での聞き手の行為に対する質問や確認）にしか使えないようである。一方、「～をした」には人称の制限がないようだが、1 人称主語で用いると文語的な感じがする。「顔を赤くした」では、自分の顔を見ることはできないのでもっぱら他者の行為の観察になる。一方「舌を噛んだ」では他人の口の中は見えない上に、痛みもわからないので話者自身の行為か、発話の現場での聞き手の行為に対する質問や確認になると考えられる。

本稿の対象言語における調査結果は次のようになった。

表 5: 本稿対象言語での生理的反応などの自動的動作・状態での自他動詞／形容詞の分布
（「形」は形容詞）

分類	調査例文	トルコ語	ナーナイ語	モンゴル語	日本語	朝鮮語
生存のための 欲求	喉が渇いた	形	形／自	自	自	自他
	お腹が空いた	形	形／自	自	自他	形他
呼吸器等の 反射的な反応	くしゃみをした	自	自	自	自他	自他
	あくびをした	自	自	自	自他	自他
	咳をした	自	自	自	自他	自他
その他	顔を赤くした	自	自他	自	自他	自他
	舌を噛んだ	他	他	他	他	他

朝鮮語では日本語と同様に「舌を噛んだ」以外で自他両用の表現ができる（「お腹が空いた／お腹を空かせている」 bai gopuda. / bairur gorhgo 'issda, 「{くしゃみ／あくび／咳} {を
する／が出る}」 {jaicaig / hapum / gicim} {=rur hada / =i nada} (ただし gopuda は形容詞である)。「喉が渇いた」 (mog='i maruda.) では「*喉を乾かしている」にあたる他動的表現も可能である (mogmarrahago 'issda)。トルコ語の空腹と喉の渇きでは形容詞 (aç, susuz) が用

いられるが、その子の母親など当人の状況をよく把握できている立場の者であれば発話できる、そうでなければ推量表現になる（風間（2013）を参照されたい）。ナーナイ語では形容詞でも動詞でも表現できる（*ǰəmusi hungry, ǰəmusi-i-ni be.hungry-PTCP.IPFV-3SG, omimosi thirsty, omimosi-i-ni be.thirsty-PTCP.IPFV-3SG*）。

「アルタイ」諸言語の3言語では「くしゃみをした」「あくびをした」「咳をした」のような表現には名詞を用いず、自動詞を用いる（(T) *Hapşır-dı. sneeze-PST, Esne-di. yawn-PST, Öksür-dü. cough-PST* || (M) *Najtaa-san. sneeze-PTCP.PFV / Naitaa-lga-san sneeze-CAUS-PTCP.PFV, Evşee-sen. yawn-PTCP.PFV / Evşee-lge-sen. yawn-CAUS-PTCP.PFV, Xania-san. / Xania-lga-san. / Xania-lg-uul-san. cough-PTCP.PFV / cough-CAUS-PTCP.PFV / cough-CAUS-CAUS-PTCP.PFV* || (N) *jaksoŋ-ki-ni. sneeze-PTCP.PFV-3SG, ǰawansi-lo-xa-ni. yawn-INC-PTCP.PFV-3SG, siŋbisi-xa-ni. cough-PTCP.PFV-3SG*）。モンゴル語の「咳をする」では原形と共に使役形、二重使役形を同じような意味で用いることができるという。このモンゴル語における3語においては、使役を伴わない方には特に特別なニュアンスが感じられないが、伴った方は制御不能で、非意図性が感じられるという。なお朝鮮語では接頭辞もしくは接頭的な要素により、「合図をする咳払い」(*kun-gicim*)、「わざとする咳」(*həs-gicim*)、「ひっきりなしに出る咳」(*jan-gicim*)が区別されるという（油谷他（編）（1993: 1915））。

トルコ語の「顔を赤くした」については川口（1999）に *Yüz-ün-ü kız-dır-dı. face-3SG-ACC redder-CAUS-PST* のような例があがっていたが、調査してみたところこの文は非文と判断され、*Kırmızı ol-du. red become-PST* 「赤く なった」がもっとも良い文で、*Yüz-ü kızar-dı. face-3POSS redder-PST* も使用できると判断された。

「舌を噛んだ」については、どの言語も普通の他動詞文による表現を示した（(T) *Dil-i-ni ısır-dı. tongue-3SG-ACC bite-PST* || (M) *Xel-ee xaz-san. tongue-REFL bite-PST* || (N) *siŋmu-ji səkpəŋ-ki-ni. tongue-REFL.SG bite-PTCP.PFV-3SG* || (K) *Hyə=rur mur-’əss-da. tongue=ACC bite-PST-IND*）。

4. 5. 他言語との対照的・類型的観点から問題となる「再帰的」動作

まず Haspelmath (2003) の意味領域地図における例文の調査結果は次のようになった。

表 6: 本稿の対象言語での Haspelmath (2003) での「再帰／中動」における自他の分布

	日本語	朝鮮語	ナーナイ語	モンゴル語	トルコ語
ドアが開いた (anticausative)	自	自（受動／ 自動詞化）	自（受動）	自（受動）	自（受動）
その本はよく売れる (potential passive)	自	自（受動／ 自動詞化）	自（受動）	自（受動）	他 (不定対格)
その問題は委員会で 議論された (passive)	自（受動）	自（漢字語 ＋ナル）	他	自（使役受身）／相 互／相互使役	自（受動）
あの犬は人を噛む (deobjective)	他	他	他	他（不定）	他 (超越時制)

人間の行為者が存在する受動 (passive) に対して、無意志の無生物による自然発生的な逆

使役 (anticausative) と潜在可能 (potential passive) では「アルタイ」諸言語および朝鮮語でいわゆる「受動」の形式がよく用いられていることがわかる (「ドアが開いた」: (T) Kapı aç-ıl-dı. door open-PASS-PST || (M) Xaalga nee-gde-sen. door open-PASS-PTCP.PFV || (N) uikə nixəli-kpi-ni (<*nixəli-p-ki-ni). door open-PASS-PTCP.PFV-3SG || (K) Mun='i 'yər-ry-əss-da. door=NOM open-PASS/INTRVLZ-PST-IND, 「その本はよく売れる」: (T) Kitap iyi sat-ıyor. book well buy-PROG || (M) Ter nom sajn zara-gda-na. that book well buy-PASS-INT.FUT || (N) tæi dajsa uləən-jī xadasi-p-či-i-ni. that book good-INS buy-PASS-MULT-PTCP.PFV-3SG || (K) Guu caig='um jar par-ri-n-da. that book=TOP well buy-PASS/INTRVLZ-PRS-IND)。これらの言語のこれらの形式はやはりこうした機能をその中核に持つものではないかと考える。

「その問題は委員会で議論された」のモンゴル語訳には (M1) Ter asuudl-ijg xurl-aar {xele-lc-sen / xele-lc-üül-sen}. that problem-ACC committee-INS {talk-RECIP-PTCP.PFV / talk-RECIP-CAUS-PTCP.PFV / Ter asuudal xele-lc-üül-gd-sen⁶. that problem talk-RECIP-CAUS-PASS-PTCP.PFV の3つの表現が可能であると判断された。この場合2つ目の表現における使役接辞はあってもなくても意味が変わらないという。

「あの犬は人を噛む」では「人を」という目的語を入れた文で訊いてしまったので、目的語消去 (deobjective) の文の調査としては失敗だったかもしれない。トルコ語における超越時制の文は次のとおりである: O köpek insan-lar-ı ısır-ır. that dog people-PL-ACC bite-AOR。

次に Kemmer (1983) を参考に、[4] 自己利益 (Self-benefactive middle) (自分のために) 買う、学ぶ、[6] 移動運動 (Translational motion): 登る、行く、飛ぶ、走る、泳ぐ、[7] 感情・心理変化 (Emotional middle): 怒る、喜ぶ、退屈する、疲れる、[8] 感情的発話行為 (Speech action of an emotive type): 嘆く、自慢する、[9] 認知 (Cognition middle): 覚える、について目的語 (具体的には定対格、不定対格、再帰 (モンゴル語とナーナイ語で)、指定格 (ナーナイ語で) の項) がとれるかとれないか、を調査した。[5] 本来的相互行為 (Naturally reciprocal events) については、「アルタイ」諸言語には相互専用の接辞があり、日本語にも補助動詞「～し合う」があるので今回は扱わなかった。さらに李 (2019) の[4]も参考に、間接行為を調査した。

表 7: 本稿の対象言語での Kemmer (1983) での「再帰」における自他の分布

(なお「与」「処」「奪」「具」「副」「間接」は「与格」「処格」「奪格」「具格」「副動詞」「間接行為」を示す)

		トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語	朝鮮語	日本語
感情心理	～に疲れる	自 (与/副)	自 (与/奪)	形/自 (具/副)	形/自 (与)	自 (与)
	～に怒る	自 (与)	自 (与)	自 (方向格)	自 (与)	自 (与)
	～に退屈する	自 (奪)	自 (奪)	自 (具)	他	自 (与)
	～ {に/を} 喜ぶ	自 (与)	自 (副)	他 (再帰項)	自 (与)	他/自 (与)

⁶ この二重使役文は(M1)の話者の発話によるものだが、(M2)の話者は言わないという。二重使役文の使用には、話者や方言によるゆれがあるものと考えられる。

感情 発話	～を自慢する	自（具）	自（具）	他（再帰項）	他	他
	～を嘆く	自（奪）	自（与）	他（再帰項）	他	他
移動	山を登る	自（与）	自（与）	自（方向格）	他	他
	道を走る	自（与）	自（具）	自（処）	他	他
	川を泳ぐ	自（処）	自（与）	自（与／具）	他	他
	空を飛ぶ	自（処）	自（与）	他	他	他
	道を渡る	自（与）	他／自（具）	他／自（処）	他	他
認知	～を覚えている	他	他	他	他	他
自己 利益	～を買う	他	他（補助動詞）	他（指定格）	他	他
	～を学ぶ	他	他	他	他	他
間接	家を建てた	使役	使役	他	他	他

調査に使った例文本体は次のようである：「彼は仕事に疲れている」「彼は弟に怒った」「彼は先生の話に退屈している」「彼は（自分の）勝利を喜んだ」「彼は自分の勝利を自慢した」「彼は自分の不運を嘆いた」「彼はその山を登った」「彼はその道を走った」「彼はその川を泳いだ」「鳥が空を飛んだ」「彼はその道を渡った」「彼は（自分のために）本を買った」「私は英語を学んだ」「彼は家を建てた」。

感情心理述語ではどの言語も対格以外の斜格をとることが多い。感情述語が主格対格構造以外の格枠組みをとることについては、筆者はこれまで角田（2009: 101）の二項述語階層において、左から5番目の位置を占めていることから説明できると考えていたが、このように再帰／中動の観点から説明することも可能である。

感情発話述語では朝鮮語および日本語で他動的表現が顕著であり、モンゴル語では再帰項をとることによって他動的表現となっている。

しかし朝鮮語・日本語と「アルタイ」諸言語がもっとも顕著な違いを示すのは移動表現である。朝鮮語・日本語が他動的表現を示すのに対し、「アルタイ」諸言語はナーナイ語に少し見られる以外は、他動的表現を嫌うようだ。これらのことが両グループ内で一致している理由は、偶然に一致して各言語で個別に発達したためであるとは考え難く、それぞれのグループ内の言語間で言語接触があったために似てきたものであると考えたい。

自己利益に関しては、ナーナイ語に指定格（「～のためのものとしての～を」）という特別な格のあることが注目される。ただしこれは主語以外の人物の利益になる時も、その人物の人称接辞を後続させることによってその事態を表現できるので、自己利益の再帰的な面の現れとみることはできないかもしれない。

モンゴル語の自己利益における補助動詞による表現とは *-žav-*「～して取る」による表現である (Ter nom xudalda-žav-san. that book trade-CVB.IPFV take-PTCP.PFV「彼は本を (自分のために) 買った ((lit.) 買って 取った)」。Kemmer (1983) は自己利益も再帰的な事象に有標な動詞形式が用いられる状況のタイプの一つとしていたが、モンゴル語におけるこの *-žav-*「～して取る」も再帰性が補助動詞という具体的な形をとって現れた有標の動詞形式の一つとみることができるだろう。

トルコ語において、実際の行為者が主語でない場合に義務的に使役が使われることについては先行研究に記載がある (林 (2013: 160))。実際に「彼は家を建てた」は *Ev-in-i inşa et-tir-di. house-3POSS-ACC construction do-CAUS-PST* と訳され、自分で建てた場合には *Kendi ev-in-i inşa et-ti. by oneself house-3POSS-ACC construction do-PST* と言うとされた。モンゴル語の話者も同様に使役文の使用が義務的であるという。一方、ナーナイ語と朝鮮語のコンサルタントに使役文を示すと、それは使役の意味であるとし、自分自身で建築しなくとも非使役文で表現することができるとの答えであった。

4. 6. 怪我や病気など過失等による制御不能な自動的／他動的動作・状態

この節で扱う表現のうち、例えば「足を折る」は大きな力を加える動作であり結果に大きな変化も伴うが、制御不能で非意図的な行為でもあり、ヤコブセン (1989) があげていた他動詞の伝統的な定義の 4 つの意味要素において大きな矛盾を示している。したがってこのような事象の表現では多くの言語で自他のゆれが観察されるのではないかと予想される。実際に特にモンゴル語で興味深い自他のゆれが多く観察できた。ここでは次の表に見るような表現を調査し、表 8 のような結果を得た。

表 8: 本稿の対象言語における怪我や病気など制御不能な表現における自他の分布

	朝鮮語	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語	日本語
吐き気がする	形容詞／自	再帰／受動	自／自の使役	自	自
目が悪くなった	自	自	自他 (再帰項)	自	自
足を折った	自 (他)	他	自他	(自) 他	自他
お腹をこわした	自	他	自他	他 (再帰項)	他
針を刺した	受動	他	他 (再帰項)	他 (再帰項)	他
指を切った	受動	他	他 (再帰項)	他 (再帰項)	他

朝鮮語の *məisuggəbda*「吐き気を催す、むかつく」は形容詞であるが、これより派生した動詞 *məisuggə'u-ə-jida, məisuggə'u-ə-hada* も使われる。トルコ語の「彼は吐き気がした」は *Mide-si bula-n-di. stomach dirty-PASS/REFL-PST* で形態からは受動か再帰か判断できない。竹内 (1989: 61) には *bula-* は「汚す、染める、まぶす、なすりつける」、*bulan-*「吐き気を催す、汚れる、濁る、曇る、まみれる、乱れる」と記述されている。モンゴル語では *Ter og'-son. (s)he nauseate-PTCP.PF* の他に使役を伴った *Ter ogi-ul-san. (s)he nauseate-CAUS-PTCP.PF* も可能であり、使役を伴わない方には一回性が、伴った方には多回性が感じられるという。

モンゴル語において「目が悪くなった」という事象は *Ternij nüd (n') muud-san. (s)he.GEN eye (3SG) get.worse-PTCP.PFV* もしくは *Ternij nüd (n') muu bolson. (s)he.GEN eye (3SG) become-PTCP.PFV* などとすることができるが、*Ter xar-a-x-aa baj-san. (s)he see-E-PTCP.IPFV-REFL stop-PTCP.PFV* と言うこともでき、これは完全に盲目になってしまったことを意味するという。

モンゴル語において、「足が折れた」は自動的表現で *xöl xugar-san. (leg break(int.)-PTCP.PF)* と言うことができるが、同じ主語の他の動作に後続する際には他動的表現が用いられ、自動的表現の使用は変に感じられるという。ここには他動的表現による主語不転換の機能（風間 (2002), 井上 (1976: 104)）をみることができる。

- (24) *Bi un-aad xöl-öö xugal-san.*
 I fall-CVB.PFV leg-REFL break(tr.)-PTCP.PFV
 「私は転んで足を折った。」

- (25) ? *Bi un-aad xöl xugar-san.*
 I fall-PTCP.PFV leg break(int.)-PTCP.PFV
 「(lit.) 私は転んで足が折れた」

トルコ語とナナイ語でも他動詞による主語不転換の文で表現された ((T) *Düş-üp bacağ-im-ı kır-dı-m. fall-CVB.PFV leg-1SG.POSS-ACC break-PST-1SG* || (N) *Mii tuu-pi bəgji-ji bojali-xam-bi. I fall-CVB.COND leg-REFL.SG break-PTCP.PFV-1SG*)。一方、朝鮮語では「私は転んで足を折った」は次のように自動詞で表現された。

- (26) *Na=num gurr-əsə dari=ga bur-ə-jy-əss-da.*
 I=TOP fall-CVB.PFV leg=NOM break(tr.)-CVB-INTRVLZ-PST-IND

しかし接尾辞 *-dduuri-da* を用いた他動的表現も可能であるという。油谷他 (編) (1993: 606) によれば *-dduuri-da* は「《動詞の連用形について動詞の意を強めたり他動詞をつくったりする》...てしまう」と記述されている（伊藤 (2012: 138) も参照）。

- (27) *Na=num dari=rur bur-ə-dduury-əss-da.*
 I=TOP leg=ACC break(tr.)-CVB-TRVLZ-PST-IND

「お腹をこわした」について、モンゴル語では自動的表現と他動的表現の両方が可能であるという ((M) *Minij gedex xjamar-san. I.GEN stomach become.sick-PTCP.PFV* 「(lit.) 私のお腹がこわれた」 / *Bi xüjten us uu-g-aad gedex-ee xjamraa(-čix)-san. I cold water drink-E-CVB.PFV stomach-REFL make.bad(-COMPL)-PTCP.PFV* 「私は冷たい水を飲んでお腹をこわした」)。

なおモンゴル語で「下痢をする」という行為には、次のように使役接辞のついた動詞形が用いられるという。ただし主語は *gedex* 「お腹」であり、*bi* 「私」を主語にすると *gedex* 「お腹」は共起できなくなる ((*Minij gedex güj-lge-sen. I.GEN stomach run-CAUS-PTCP.PFV* 「私は下痢をした ((lit.) 私のお腹は走らせた)」 / *Bi güj-lge-sen. I run-CAUS-PTCP.PFV* 「私は下痢をした ((lit.) 私は走らせた)」)。動詞が使役を伴っているため、他動的表現になることが予想されるが、再帰のついた目的語を取ることはできないという (**Bi gedex-ee güj-lge-sen. I stomach-*

REFL run-caus-PTCP.PF 「(意図した(lit.)の意味) 私は自分のお腹を走らせた」。

本来意図的に行うと思われる行為を非意図的再帰的行ってしまった場合にも使役を用いることのできる場合があるという (Ter gar-aa züün-d xatg-uul-čix-san (s)he hand-REFL needle-DAT prick-CAUS-COMPL-PTCP.PFV 「(lit.) 彼は指を針に刺されてしまった」⁷、ただし原動文 (／非使役文) でも言える : Ter gar-aa züü-g-eer xatga-čix-san. (s)he hand-REFL needle-E-INS prick-COMPL-PTCP.PFV 「彼は手に針を刺してしまった」)。他方、Ter xutg-aar xuruu-g-aa züs-čix-sen. (s)he knife-INS finger-E-REFL cut-COMPL-PTCP.PFV 「彼はナイフで指を切ってしまった」はこのように原動文でしか言えず、*Ter xuruu-g-aa xutgan-d züs-üül-čix-sen 「(意図した(lit.)の意味) 彼は指をナイフに切られてしまった」という文を聞くと、ナイフが生きているかのように感じるという ((M1) による)。

「針を刺した」「指を切った」の事象については、トルコ語とナーナイ語で使役の接辞を用いた表現が現れることが期待されたが、今回の調査では単なる他動詞によって表現された (「針を刺した」 : (T) İstemedən el-in-e bir iğne sapla-dı. carelessly hand-3POSS-DAT one needle stick-PST || (N) ñoani ɣaala-ji xurmə-ji xurmusilə-xə-ni. (s)he hand-REFL.SG needle-INS stick-PTCP.PFV-3SG、「指を切った」 : (T) İstemedən bıçak-la parmağ-in-ı kes-ti. carelessly knife-INS finger-3POSS-ACC cut-PST || (N) ñoani kučəən-ji čumčuəm-bi čaali-xa-ni. (s)he knife-INS finger-REFL.SG cut-PTCP.PFV-3SG)。しかし竹内 (1989: 326) には再帰接辞を用いた İğne el-ım-e sapla-n-dı. needle hand-1POSS-DAT stick-REFL-PST という表現もあがっている。

4. 7. 開始・終了 (停止・制止) を示す事象の自動的／他動的動作・状態

まず日本語について内省してみると、「やむ」と「やめる」は形態的に自他の対立を示し、「雨がやむ」と「(私は自分が) 行くのをやめる」のように構文的にも自他の対立を示すように見える。しかし「私は彼が行くのをやめる」とは言えず、「私は彼が行くのをとめる」もしくは「私は彼が行くのをやめさせる」とする必要がある。つまり行為の帰着点が自己以外に及ぶ場合は、元が他動詞であるのにさらに使役にする必要がある。したがって「やめる」も一種の再帰動詞であると考えられる。このような点に留意しつつ、本稿の対象言語について調査したところ、次のような結果を得た。なお本節の表では言語間における再帰性の違いや表現間の再帰性を序列化するのが難しかったため、その程度を反映した順序に配列できていないことをことわっておく。

⁷ なお蜂に刺された場合にはやはり xatg-uul-čix-san prick-CAUS-COMPL-PTCP.PFV と (受身の意の) 使役接辞を伴った形式で言うが、自分で刺したわけではなく再帰性はないので、今度は原動の xatga(-čix)-san は使えないという。

表 9: 本稿の対象言語における終了・開始を表わす表現における自他の分布

(「別」は語源的に別語彙(注記がなければ形の上での自他対応あり、[自＝他]は自他同形であることを示す、() つきのものは文法的だがふつつ言わない表現であることを示す)

	モンゴル語	ナナイ語	トルコ語	朝鮮語	日本語
雨が止んだ	再帰	自	自	自	自
シャーマンは雨を止めた	再帰の使役	自の使役	自の使役	再帰 (別)	他 (別)
車は止まった	自	自	自	再帰	自
車を止めた	他	自の使役	自の使役	再帰	他
自分が行くのをやめた	再帰	自	再帰	再帰	再帰
人が行くのを止めた	再帰の使役	他 (別)	他 (別)	自の迂言的 使役	他 (別)
人が行くのをやめさせた	再帰の使役／ 他	他の使役	他 (別)	自の迂言的 使役	再 帰 の 使 役
仕事が終わった	自	(自＝他)	(自)	自	自
仕事を終えた	他	副 V+ [自＝他]	自の使役	他	他
人の仕事を終えた	他	—	迂言的表現	他	他
人に仕事を終わらせた	他の使役	—	迂言的使役	自／他の迂 言的使役	自の使役
仕事が始まった	自	(自＝他)	(自＝他)	自 (漢語動 詞＋ナル)	自
自分の仕事を始めた	自／自の使役	自＝他	自＝他	他 (漢語動 詞＋スル)	他
人に仕事を始めさせた	自の (二重) 使 役	アスペクト接辞 ＋使役	[自＝他] の 使役	他の使役	他の使役

ここでは特にモンゴル語に関して興味深い自動的表現／他動的表現のゆれが観察された。紙幅の都合もあり、本節ではモンゴル語の状況のみについて説明を行う。bol'- と boli-ul- (-ul は使役／他動詞化の接辞) の下記の例文を見る限りでは、bol'- が「やむ」の意の自動詞で、boli-ul- が「やめる」の意の他動詞のように見える (Minij tomilolt bol'-son. I.GEN business.trip stop-PTCP.PFV 「私の出張は中止だ (台風が来るから、などの理由で)」 vs. Bi tüünij tomilolt-yg n' boli-ul-san. I (s)he.GEN business.trip-ACC 3POSS stop-CAUS-PTCP.PFV 「私は彼の出張をやめさせた」)。しかし、次のような再帰的な事態では、bol'- は再帰接辞のついた名詞項 (目的語) を伴って他動詞のように使われる (Bi tomilolt-oo bol'-son. I business.trip-REFL stop-PTCP.PFV 「私は (自分の) 出張をやめた (自分の意志で決めて)」、Bi jav-a-x-aa bol'-son. I go-E-PTCP.IMP-REFL stop-PTCP.PFV 「私は (自分の) 行くのをやめた」)。上記の文と同じ構文に boli-ul- を使うこともできるが、意味内容は再帰的ではなくなる (Bi tomilolt-oo boli-ul-san. I business.trip-REFL stop-CAUS-PTCP.PFV 「私は自分の出張をやめてもらった (会社に言って、会社の上司に頼んで)」)。しかしこの動詞 (bol'-) は他者の行為に対しては他動詞的に使うことができず、

使役形にしなければならない (*Bi ternij jav-a-x-yg n' bol'-son. vs. Bi ternij jav-a-x-yg n' boli-ul-san. I (s)he.gen go-E-PTCP.IPFV-ACC 3POSS stop-CAUS-PTCP.PFV 「私は彼が行くのを(その)やめさせた」)。モンゴル語では基本的に他動詞は意志動詞であり、その主語は人間などであるが、この動詞 (bol'-) は無生物主語に対しても他動詞的に用いられる (Boroo or-o-x-oo boli-loo. rain fall(lit. enter)-E-PTCP.IPFV-REFL stop-IND.PFV 「雨が降るのをやめた。(雨が止んだ)」)。

モンゴル語にはこの bol'- のように、再帰的な事態に限って目的語をとる構文を示す動詞が他にも存在することがわかった: baj- 「やめる」、zogs- 「止まる、やむ」、duus- 「終わる」 etc. 本稿ではこのような動詞を「半他動詞」と呼ぶことにする。一方、exl- 「始める/始まる」は自他両用の動詞である。再帰動詞も考慮に入れて図に表現するならば、次のような関係になっている。なお朝鮮語の mǎmcuda 「止まる、やむ、(活動・動きなどを)一時中断する、止める」も半他動詞であると思われる。

自発的・逆使役的事象	自分への行為 (再帰)	他者への行為
(一般の) 自動詞	(一般の) 他動詞	
自動詞	他動詞 (再帰動詞)	他動詞
半他動詞		他動詞

図 1: 本稿の対象言語における再帰動詞と半他動詞の機能する範囲

5. おわりに

以上、アルタイ型言語における再帰表現をみてきた。

では例えば Standard Average European と比べた場合のアルタイ型言語における再帰表現の特徴は何であろうか? まず SAE の多くの言語において (Kemmer (1988) が示しているように) 再帰代名詞起源の形式によって中動化することがなく、少なくとも見た目は体の部分への単なる他動的表現でもっぱら表現する傾向があると言えるだろう。これは動詞の自他に関して、欧州の印欧諸語では自動詞化が多いのに対し、北アジアの OV 言語では他動詞化派生が大部分を占めることに起因していると考えられる。これはさらに欧州の印欧諸語では他動詞優勢あるのに対し、アルタイ型言語では自動詞が優勢であるため他動詞化の方が必要であることに起因する (風間 (2019: 159) を参照)。再帰に一見項の増減の観点からは逆の働きをする使役が用いられることもこれに起因するものと考えられる。体の部分などへの働きかけでも、欧州の印欧諸語は対象となる人間全体を目的語にしようとする傾向があるのに対し、日本語などでは働きかけを行うその体の一部分を目的語にしようとする傾向がある (風間 (2020: 20-21) を参照)。これもアルタイ型言語の再帰表現が見た目上、体の部分への単なる他動的表現になっている原因であろう。

次に、本稿の対象言語における再帰表現の間ではいかなる差異があったのだろうか? 特に移動動詞と生理的反応の動詞で顕著に観察されたが、朝鮮語と日本語はこれらの動詞群で顕著に同じような他動的表現を示したのに対し、「アルタイ」諸言語では多く自動的表現が行われていた。これは両方のグループの中での言語接触があったためであると考えられる。

しかし今回再帰表現に取り組んでみて、その範囲はきわめて広く、多くの他の文法現象と関連していることがわかってきた。その点ではまだ再帰表現の対照・類型論的研究はまだ始

まったばかりであるとも言えるだろう。今後はさらにより帰納的な研究方法によってアルタイ型言語の再帰表現を解明していきたいと考えている。

〔謝辞〕

本稿は、北方言語学会第5回大会で発表させていただいた内容が基になっている。学会で発表を聞いてくださった先生方、コメントを下された先生方に感謝申し上げます。特に誤植を指摘して下さった角道正佳先生に深く感謝申し上げます。貴重なコメントを下された2名の査読者の先生方にもお礼申し上げます。そして何より時間を割いて例文の適格性を判断するとともに貴重なコメントを下されたコンサルタントの方々に深くお礼申し上げます。

略号一覧 (Leipzig Glossing Rules にないもののみ)

REPET: repetitive-reversive aspect 「反復・反動体」 / SIM: simultaneous 「同時」

参考文献

- 天野みどり (1987a) 「日本語文における <再帰性> について: 構文論的概念としての有効性の再検討」『日本語と日本文学』7.
- 天野みどり (1987b) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151: 110-97.
- 江畑冬生・Akmatalieva Jakshylyk (2022) 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』新潟: 新潟大学人文学部アジア連携研究センター
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A comprehensive grammar*. Routledge, London.
- Haspelmath, M. (2003) The geometry of grammatical meaning: Semantic maps and cross-linguistic comparison. *The new psychology of language*. 217-248. Psychology Press.
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 下・意味解釈を中心に』東京: 大修館書店
- 伊藤英人 (2012) 「データ: 「ヴォイスとその周辺」朝鮮語」『語学研究所論集』17: 128-141.
- 川口裕司 (1999) 「現代トルコ語の使役構文 ―その意味と機能―」『言語研究』IX. 東京外国語大学
- 風間伸次郎 (2002) 「ツングース諸語における「使役」を示す形式について」『環北太平洋の言語』8: 37-50. 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書 A2-012.
- 風間伸次郎 (2007) 「ツングース諸語の三人称代名詞について」大東文化大学語学教育研究所(編)『語学教育フォーラム』13: 173-184.
- 風間伸次郎 (2013) 「アルタイ型言語における感情述語」北方研究教育センター(編)『北方人文研究』6: 83-101.
- Kemmer, S. (1988) *The middle voice*. (Typological Studies in Language 23). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 河野六郎 (1955) 『朝鮮語』『世界言語概説 下巻』東京: 研究社
- 李静 (2019) 『日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的研究』博士論文(九州大学)

- 水谷静夫 (1964) 「話を終わる」と「話を終える」『口語文法講座 3 ゆれている文法』東京：明治書院
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法 —Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』47.
- Onenko, S. N. (1980) *Nanajsko-russkij slovar'*. Moskva: Russkij jazyk.
- Onenko, S. N. (1986) *Russko-nanajskij slovar'*. Moskva: Russkij jazyk.
- 小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林
- 小沢重男 (1985) 『元朝秘史全釈 (中)』東京：風間書房
- 桜井光昭 (1977) 「古代語の再帰的他動詞」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』26: 67-82.
- 塩谷茂樹 (2007) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』(大阪外国語大学学術研究双書 35) 大阪：大阪外国語大学研究推進室編集部門
- 鈴木英夫 (1985) 「「ヲ+自動詞」の消長について」『国語と国文学』62-5.
- 竹内和夫 (1989) 『トルコ語辞典』東京：大学書林
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版 (初版：1991)
- 梅谷博之 (2008) 『モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の意味と構文』博士論文 (東京大学大学院人文社会系研究科)
- ヤコブセン, M. ウェスリー (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』東京：くろしお出版
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 (編) (1993) 『朝鮮語辞典』東京・ソウル：日本・小学館 韓国・金星出版社共同編集

On the Reflexive Expression in the Altaic-type Languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Altaic-type languages, 'Altaic' languages, reflexive, linguistic typology, (in)transitive verb

It has been said that reflexive expressions exhibit properties intermediate between transitive and intransitive. In this study, I will analyze languages of the Altaic-type, specifically Altaic, Korean, and Japanese, to see whether a wide range of reflexive events are expressed in these languages in the form of intransitive or transitive expressions, or whether they show some intermediate characteristics between the two. For the Altaic languages, I will deal with Turkish from the Turkic languages, Khalkha Mongolian from the Mongolic languages, and Nanai from the Tungusic languages. In this paper, regardless of the form of the verb, if there is an accusative-argument, it is broadly considered an “transitive expression,” and if there is no accusative-argument, it is considered an “intransitive expression.” After classifying the expressions of the languages covered in this paper according to this criterion, I will again focus on the form of the verb.

The characteristics of reflexive expressions in Altai-type languages contrasted to Standard Average European are as follows: Unlike in SAE, reflexive situations tend to be expressed exclusively by a mere transitive expression to a body part in Altai-type languages. This may be due to the fact that in the North Asian OV languages causative derivation is preferred on transitivity verb pairs, whereas in SAE anticausative derivation is preferred. This is further attributed to the fact that intransitive verbs are dominant in Altai-type languages, whereas transitive verbs are dominant in SAE. Part of the body tends to be treated as the subject in Altai-type languages, whereas the whole person tends to be treated as the object in transitive expression in SAE (see Kazama (2020: 20-21)). This may be another reason why reflexive expressions in Altaic-type languages are, in appearance, mere transitive expressions to body parts.

The differences among the reflexive expressions in the target languages in this paper are as follows: The most striking differences were observed for the verbs of movement and physiological reaction. Whereas Korean and Japanese showed strikingly similar transitive expressions for these verb groups, and the “Altai” languages had many intransitive expressions. It seems that this is due to language contact within both groups.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)